



復。お目当てのヒグマやクジラにはあいにくお目にかかれませんでした（彼らも観光客相手で疲れたのでは?）、その代わり、半島の先、わずかに40キロに横たわる国後島をはっきりこの目で見るのができたのは貴重な体験でした。と同時に、日本にとって地理的に最も近い外国がロシアであるという厳然たる事実を再認識させられました。オ

和条約を結ぶという日本側の宿願が実現する見通しは全くありません。わずかに数年前、故安倍晋三首相が在任中にプーチン大統領と26回も会談し、一時期かなり親密な関係を築いたことがうそのようです。将来、日露関係が再び好転するとしても相当先の話になるでしょう。そうであるならば、こちらも長期戦覚悟で、この機会に一度立ち

代半ばころから、不凍港を求めて南下政策を推し進め、日本近海にもしばしば出沒していました。幕末には、プチャーチンを先頭に対日接近の機会を虎視眈々（たんたん）と狙っていました。米国のペリー艦隊来航（1853年）をきっかけに日本が開国すると、直後に日露和親条約（55年）、続いて日露修好通商条約（58年）を締結。これに

ロシアとどう付き合っていくべきか

北方領土問題の歴史的経緯と見通し

私事で恐縮ですが、今年に結婚50周年に当たるので、ささやかな記念行事の一つとして9月初めに、長年計画していた北海道の知床半島へ行って参りました。幸い好天に恵まれ、夫婦水入らずで知床旅情を満喫しました。

ホーツク海では露海軍の原潜がたむろし、日本の排他的経済水域では、ロシアの漁船が盛んに操業しているとのこと、港の近くではなんとなく緊張感が漂っているように感じました。

北方領土を 間近に目撃

ウトロと羅臼ではそれぞれ大型の観光船に乗って知床半島の突端まで往

ウクライナ侵攻以来、ロシアはすっかり世界の厄介者視されていますが、日露関係もこのころ冷え込んだままで、北方領土問題を解決して平

ロシアの 伝統的な 南下政策

帝政時代のロシアは18世紀初め、日本の江戸時

止まって、日露関係の来し方行く末をしつかり考え直す必要があります。以下、日露関係の歴史を駆け足で振り返ってみましょう。

より、下田、函館、長崎の3港が開かれるとともに千島列島の択捉（エトロフ）と得撫（ウルップ）の間、西国の国境が定められました。これが、現在の北方4島問題の原点です。

ちなみに、これら幕末の条約交渉では、三河縁の初代外国奉行・岩瀬忠震（ただなり）が大活躍したことは周知の通り。詳しくは、本欄第2回「愛知県が生んだ歴史上の大人物」（2020年9月29日）をご覧ください。

その後明治時代になると、ロシアの南下政策は一段と加速し、北海道（かつての蝦夷）への領土的野心をちらつかせるようになります。北からの脅威にさらされた明治新政府は、北海道開拓を急ぎ、北の守りを固めます。



知床峠から遠く国後島を望む

（2面に続く）

令和つれづれ草

金子熊夫

で、早期のソ連の対日参戦を求めるあまり、スターリンが提示した「条件」をそのままのんだものとみられます。

千島防衛で奮戦した樋口季一郎

この辺の状況は大変複雑なので割愛しますが、スターリンがドイツ占領政策にならって、日本の分割占領方式を考えていたことは明らか。具体的に言えば、ソ連は、仙台以北の日本、少なくとも北海道の占領をもちろんでいたとされます。



北方領土(外務省のサイトから)

で、絶望的になってはいけません。今後の状況いかんによってはロシアが返還せざるを得ないような事態が生ずるかもしれないからです。過去において、それに近い状況になりかけたことが一度あります。それはソ連の政治と経済が極度に悪化した1980年代後半、アンドロポフ、チェルネンコ政権も記憶に残っています。その後東京の新宿などの盛り場では、「カチューシャ」とか「カチューシャ」など歌謡喫茶がはやり、ロシアの民謡やフォークソングが学生や若者の間で人気がありました。

実は、今回の旅行で最初に1泊した網走では、旧網走監獄を見学しましたが、そこのガイドの説明で初めて知ったことは、明治政府は、札幌からオホーツク海沿いに鉄道や道路を建設する大土木工事に、網走監獄の囚人を総動員したという事実。酷寒の厳しい環境での囚人たちの犠牲的貢献がいかに大きかったか、また、明治政府の対露恐怖感がいかに強かったかを感じ知らされました。

この辺の状況は大変複雑なので割愛しますが、スターリンがドイツ占領政策にならって、日本の分割占領方式を考えていたことは明らか。具体的に言えば、ソ連は、仙台以北の日本、少なくとも北海道の占領をもちろんでいたとされます。

ロシアとどう付き合っていくべきか

日本では、玉音放送のあった8月15日で戦争は終わったと考えられていますが、国際法上は、東京湾内の米艦艦ミズーリ号上で降伏文書が正式に調印された9月2日まで戦争が継続していたことになりました。(ちなみに、今夏プーチン大統領は9月3日を正式の「対日戦勝記念日」に指定しました)

このような歴史的経緯をみると、ロシアの北方領土への執着は極めて根強く、しかも彼らの論理によれば、4島は第二次世界大戦の結果獲得したものであるからというところなので、容易に放手する気はなさそうです。戦争で失ったものを平和手段で取り戻すのは至難の業。極端な言い方をすれば、日本がこれらの島を取り戻すには、もう一度戦争をして、しかも勝たねばならないということでしょうが(ちなみに、ポツダム宣言受託時の東郷外相の辞世の歌は「いざ尻らよ戦うなかれ戦わば勝つべきものぞ夢な忘れせよ」、もちろん、そんなことはできません。しかしだからと言って、

強大な白熊に挑む小国日本

一方のロシアは、レーニンによる社会主義革命(1917年)で「ソヴ

エト連邦」に生まれ変わり、第二次世界大戦後は連合国の一員として、ナチス・ドイツ打倒に貢献し、一気に大国化。その余勢を駆って、中立条約を結んでいた日本との

強大な白熊に挑む小国日本

このとき、千島列島の

強大な白熊に挑む小国日本

このとき、千島列島の

こうした明治政府の必死の防衛努力にもかかわらず、ロシアの野心的な南下政策は止まらず、日清戦争(1894~95年)後の下関条約で日本が中国から割譲された遼東半島の利権をロシアなどの圧力で返還させられる(三国干渉)など、日本は苦汁を飲みきれ、日露開戦に突如参入した日本との係はますます悪化。ついに日露戦争(1904~05年)となります。当時世界最強を誇ったロシア軍との戦いで小国日本が奇跡的な勝利を収めたことは全世界の驚きでした。この勝利で一気に世界の列強の仲間入りした



ヤルタ会議。前列左からチャーチル首相、ルーズベルト大統領、スターリン書記長(ウィキペディアより)

日本では、玉音放送のあった8月15日で戦争は終わったと考えられていますが、国際法上は、東京湾内の米艦艦ミズーリ号上で降伏文書が正式に調印された9月2日まで戦争が継続していたことになりました。(ちなみに、今夏プーチン大統領は9月3日を正式の「対日戦勝記念日」に指定しました)

プーチンが大統領に留まっている間はほぼ絶望的だとしても、今後国際情勢がどう変化するか誰にも予測できない以上、あらゆる可能性に備えて、いつでも柔軟に対応できるようなしておくことが重要で、領土問題の解決に安易な妥協は許されず、「臥薪嘗胆」の不屈の精神が不可欠です。

元外交官。ハーバード大学法科大学院卒。元国連環境計画(UNEP)アジア太平洋地域代表、元東海大学教授。現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として活躍中。新城市出身、86歳。